国立劇場11月歌舞伎『一谷嫩軍記』観劇記

～外国語学部英語英文学科　郷ゼミナール～

外国語学部　英語英文学科3年　友水 優月

我々のゼミナールは外国語学部英語英文学科の郷先生のもとでシェイクスピア研究をしている。シェイクスピア劇の一作品を一年かけて丁寧に精読して考察していくというのが主な活動である。今年度はA Midsummer Night's Dream（『夏の夜の夢』）を読んだ。事前に指定されている範囲の劇のテキストの予習を授業までに個人で行い、それをもとにゼミ生のみんなで意見交換をしながら、劇の内容の考察を進めていく。毎回、ランダムに振り分けられたメンバーでグループワークでの活動をするため、いろいろな人の意見を聞くことができる。また、ゼミ生同士で話す機会が多いので、自然にみんなの仲も深まり、気軽に自分の意見を発表することができる。受身ではなく主体的な学びが出来るゼミである。加えて、授業外活動も多い。

今年度はコロナ禍ということもあり、残念ながら例年通りに活動を行うというわけにはいかなかったが、最近は世の中の動きに合わせて少しずつ観劇などにも行けるようになってきた。十一月には明治大学シェイクスピア・プロジェクトによる『ロミオとジュリエット』の観劇に行き、翌週郷ゼミ三年生全員で歌舞伎『一谷嫩軍記』（いちのたにふたばぐんき：並木宗輔作：1751年初演）の観劇に国立劇場に行った。観劇後には、今回観た作品の面白さについてのレポート課題が出され、優秀なレポートはゼミ生にも公開される。この仕組みにより、より一層集中して観劇することができるうえに、自分とはまったく違った意見を知ることもできる。もちろん、ゼミの仲間たちと観劇後に感想を語り合いながら帰るというのも課外活動の醍醐味の一つであるが、きちんとまとめられた文章での感想というのは印象がぜんぜん違っていて面白い。

最初に歌舞伎の観劇に行くという話を聞いたときは、シェイクスピア研究といったい何の関係があるのか不思議であった。しかし、実際に歌舞伎を観て、その考えは大きく変わった。歌舞伎『一谷嫩軍記』の中の『熊谷陣屋』の場に『ロミオとジュリエット』の悲劇性を見たのである。これは、前の週に明治大学でのロミジュリの観劇に行った影響もあるだろう。ロミジュリは、いがみ合う家門のせいで結ばれることが出来ない男女の駆け落ち物語である。しかし、様々な勘違いや行き違いなどの偶然による混乱により駆け落ちは失敗し、二人とも命を落としてしまうという残酷なラストを遂げる。一方、『熊谷陣屋』は、あるひとつの真実が明らかになることにより、様々な勘違いが発覚、解決する。しかしその真実というのが、主人公がやむを得ない事情で自身の息子を殺害したというじつに悲劇的なものなのである。一見、『ロミオとジュリエット』と『一谷嫩軍記』はまったく関係のない作品に映るだろう。しかし、この二つの悲劇のラストはひじょうに似ている。ロミジュリでは、愛し合っているのに結ばれることが許されなかった二人の死のあと、残された人々の遅すぎる反省によって、いがみ合っていた家門は心を入れ替え、仲直りをする。『熊谷陣屋』では、息子を殺した罪悪感から主人公が出家し、俗世に別れを告げる。どちらも、誰かの死によって起きた後悔と、その弔いで話が終わる、という点においては同じラストであると言えるだろう。

悲劇が起きてしまってから、悔やみ、反省し、心を入れ替えるという人間の愚かな本質は、イギリスと日本という大きな文化差のもとでも同じなのだなと今回の歌舞伎観劇で痛感した。これは、

ゼミでの学びがなければ気づけなかった点であり、一見まったく関係なく見えるものを繋げてくれるのが学びというものなのである。と、今回の課外活動であらためて感じた。また、はじめて訪れた国立劇場の建物の内装に歴史を感じると同時に、古臭い感じはまったくせず、五十年以上前から存在していたとは思えないほど現代的で綺麗な建物だなと感じた。歌舞伎を観たのは初めてであったが、こんなに力強いものであるとは知らず、自分の想像以上の迫力ある動きや声に圧倒された。